

# チベット語圏最東北端で話される アムド・チベット語ホワリ方言の言語記述と現地還元

海老原 志 穂

日本学術振興会特別研究員 (PD) / 東京外国語大学

(現 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 機関研究員)

## 緒 言

アムド・チベット語ホワリ方言は、チベット語圏の最東北端(中国青海省、甘肅省の間を流れる大通河流域)で話されている。この方言は、音韻、語彙においてチベット語の中でも言語的に独特の特徴を有することが知られている<sup>1,2)</sup>。例えば存在動詞に *yod* と *snang* という2つの形式が存在し、話者の事態認識のあり方によって使い分けられているが、このような使い分けは青海省、甘肅省の一般的なアムド・チベット語にはみられない。しかし、同方言に関する具体的な言語事実は音韻や語彙を中心とした記述によって断片的に知られる<sup>3-5)</sup>のみで、語彙や文法に関する網羅的な記述、談話レベルの資料は見当たらない。筆者は2011年と2012年に青海省互助県ワザ郷において、計3か月半のホワリ方言の現地調査を行い、語彙、基本例文の記述調査およびことわざ、民話、民謡などの口承芸能の録音を行い、ホワリ方言を母語とする協力者も得ることができた。上記のような言語学的に貴重な特徴を有するホワリ方言は、現在、言語存続の危機にさらされている。ホワリ地域はチベットの中でも最も河西回廊寄りに位置し、言語の異なる多民族

(漢族、土族、回族など)との文化接触の最前線に置かれている。そのため同地域では青海省の他地域のチベット族と比べるとチベット語使用率もかなり低下している。特に互助県は、青海省の中でも、漢族人口が多い地域に区分されているため、公教育ではチベット語が教えられておらず、子供たちのチベット語離れが指摘されている。壮年層では他地域のチベット語方言話者との接触が多く、純粋なホワリ方言の話者は70歳以上に限定される。このままでは10年、20年の間に独自の特徴を有したホワリ方言は失われてしまう。住民の多くはホワリ方言の消滅に対する危機意識が強く、ホワリ方言の記録や保護を望む声も聞かれる。したがって、本研究では筆者がこれまでの調査で集めたホワリ方言のデータをもとにし、言語学的な記述(言語特徴の概説、ホワリ方言研究史、基礎語彙2,121語、特徴的な語彙、日常会話、ことわざ、民話の記録を主とする)を行うとともに、その成果を書籍の形にまとめて現地へ還元すべく準備を行った。

## 方 法

まずは今までに調査したデータの書きおこしと校正を順次進めた。2,121語の語彙集<sup>6)</sup>はすでに電子データ化してあるため、このデータの修正を行いながら、ホワリ方言の語彙の入力を行った。日常会話、ホワリ方言に特徴的な語彙の選定も行った。ホワリ方言の言語特徴の概説、言語研究史の執筆も行った。本研究の成果は、現地の人々にも読むことができ、かつ、言語学的な資料としても利用可能なように、チベット語・漢語・国際音字字母を用いてまとめた。2013年12月20日から2014年1月8日の日程で青海省にて出版社(青海民族出版社、甘肅民族出版社)および現地協力者との打ち合わせを行った。現地協力者と共同で言語特徴の概説、言語研究史、謝辞を日本語からチベット語に翻訳した。



図1 ホワリ方言の調査を行った青海省互助県のガンチョン寺

## 結 果

現地還元のための書籍用の原稿が完成し、現在、組版の作業を行っている。今年度中には、出版を行う予定である。

さらに、本研究の成果の一部を、第二回アジア地理言語学会（ICAG-2、於：バンコク、2014年5月24-25日、“Geographical Distribution of Inclusive-Exclusive Pronouns in Tibetan”、ポスター発表）および、第24回東南アジア言語学会（SEALS 24、於：ヤンゴン、2014年6月27-31日、“Sngang as an Evidential Verb”、口頭発表）にて発表した。

## 要約・今後の課題

本研究により、チベット語圏の最東北端で話されるアムド・チベット語ホワリ方言の語彙、文法、口承芸能の記述を進め、書籍にまとめる準備を行うことができた。その過程で、ホワリ方言とチベット語圏の西端で話されるバルティ方言の共通点も指摘することができた（両方言において、*sngang*という存在動詞が証拠性を表す形式として使用されている点についてはSEALS 24にて発表した）。

今後は、本研究の成果物となる書籍の出版を優先的に行い、その書籍を青海省互助県ワザ郷の各家庭や私的にチベット語を教えている8か所の学校に配布する予定で

ある。中国国内の他の少数民族言語の中でも同様に消滅の危機に瀕する言語や方言は増えつつある。それらの危機言語や方言に関する言語学的な記述は行われていても、成果が現地の人々に還元され、言語の活性化に利用されている例は多くない。本研究を通じて、記述言語学が現地社会に貢献するひとつのモデルも提示していきたい。

## 謝 辞

本研究課題を遂行するに当たり、青海師範大学教授、ソナム・トンドゥブ先生には、日本語からチベット語への翻訳にご協力いただきました。氏のご協力に心より感謝申し上げます。さらに、公益財団法人三島海雲記念財団第51回学術研究奨励金を賜りましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 別所裕介・海老原志穂：京都大学言語学研究, **26**, 77-91, 2007.
- 2) 海老原志穂：内陸アジア言語の研究, **27**, 93-122, 2012.
- 3) N. Prejevalsky: *Mongoliia i strana Tangutov: trekhletnee puteshestvie v vostochnoi nagornoj Azii*. Izd. Imp. Russkago Ob-va, pp. 258-260, 1875.
- 4) M. Hermanns: *Anthropos*, **47**, 193-202, 1952.
- 5) 華侃・馬昂前：西北民族研究1992年第1期（総第10期），pp. 189-203, 1992.
- 6) 華侃：藏語安多方言詞，pp. 1-298, 甘肅民族出版社, 2002.